



# 世田谷文学館友の会

## 会報 第51号

平成29年7月1日  
世田谷文学館友の会  
〒157-0062  
世田谷区南鳥山1-10-10  
TEL 03-5374-9111  
FAX 03-5374-9120

### 総会記念講演 『花あらし』

—小説の企みと朗読の楽しみ—から

作家阿刀田高氏・朗読家阿刀田慶子氏

慶子氏の『花あらし』朗読中に、館他階のマイクからの音声が混線する、という椿事が起こり、しばらくの中断を余儀なくされた。終わって登壇した阿刀田高氏は開口一番、「この会場でお化けが出ましたね。朗読された『あやかしの世界』と会場が、これで一気に結ばれた。以下ご講演の概要。(五月十三日・文学サロン)

モチーフ——作家が訴えたいと思っている「何か」をこう呼んでいる。定着した文芸用語ではないが、作者が小説に託して何を言おうとしているのか、読者に「何が言いたい」のか。たとえば同じ「赤穂義士」がテーマでも、武士道・忠義の心か、頭が狂った殿様にかかわった四十七人の家来が蒙ったとぼっちりか、お軽勘平の愛の物語か……扱ひ方で変わってくる。このモチーフこそ小説の中核であり、テーマとは、分けて考えたほうがいい。作家とモチーフとの関係も、常にモチーフをしつかり意識しつつ書くタイプと、何となくモチーフが作中に入ってくるタイプとの違いはあるが、この作のモチーフは何だろう、と探ることが、小説を読むには大事だ。今朗読された『花あらし』は満開の桜は美しいというより妖しい、その妖しさを訴えたいというの、ひとつのモチーフ。夫婦の愛、人間

が死に直面した時の心情、というのでも勿論ある。

もう五十年近く小説家をやっているが、あの時期までなろうとは思わなかった。小説は好きでよく読んでいたけれど、最初に書いた動機はお小遣いが足りなかったから。小説家は、頭の良し悪しとは別に、特別な能力、何か分からないヘンな能力がないとなれない、と思っていた。技術者だった父は、これぞ男子たる者の志、と思いきんでいてこれに逆らうことの出来ない時代。私は理系の高校二年のとき父が亡くなってこの束縛が解けた。早稲田の仏文に入ったのは、フランスがかっこいいと憧れていたからで、フランス特派員にでもなれば、と思っていた。早大仏文は「石を投げれば小説家志望に当る」ようなところだったが、小説家は血の中に才能が流れていない限り、たとえ遅咲きでもなれるワケはない……思いついたのは推理小説で、これも愛読していた。犯人特定のヘリクツなら書けるかもしれない、と三流の出版社からの注文で三作、四作と書いたが、我ながらへただなあ。



### 和やかに語る阿刀田高さんと奥様の阿刀田慶子さん

2017年5月13日

於・文学サロン 撮影・若宮利夫氏

モチーフの問題が心にかかっていた。小説は立派なモチーフを持っているかが問われる。推理小説はトリックの面白ささえあればモチーフがなくてもいいのだが。

松本清張は、トリックのみを重視した推理小説に、必ずモチーフを持ち込んだ。一人の人間が殺人を犯した理由、人間とは何か、どんな憎しみを抱くのか、ひそんでいる社会悪などのモチーフを。推理小説ではどうなのか、とも思いつつ、私もこれを追求したいと思った。殺人には理由がある、Aの殺人とBのその違いは何なのか。そこには現実性という、巧みなトリックとはまた別の面白さがある。私にはトリッキイなどころを楽しんでもらおうと思うところもあり、モチーフを重くみて書くところもある。

エドガー・アラン・ポー全集で「マジジリア」(書き込み)というのを見つけた。読書家のこの人が、読んだ本の余白に書いたことだけを集めたもの。「どうしてこう言えるんだ」とか、「賛成だ」とか、時には長く、入念に考えを膨らませているものも。読書というのは、これだけでなくはならないんだ、と思う。今日、入念な読書というものが少なくなっている。いちばん大事なのは、書き手と議論を闘わせることを考えながら、マジジリアを書くつもりで読むこと。「なぜこれをテーマにしようとしたのか」から始め、どういう結論に達したのか、まで全行程を辿りつつ著者と対話すること。

朗読は家内が子育てを終え、試行の末加藤

道子さんに師事して学び始めたことで興味を持ち、協力するようになった。朗読者は、小説家から見るとコワイ。きれいに読むだけではない。何が言いたいか、の人身によって表現が一つ一つ違ってくる。

冗談のところをマジメに読んでほめ。一行一行の味わいを理解してかからなければならぬ。朗読者あなどり難し、だ。短編小説を目で読む場合、読み進む内、終わりまで何頁あるかがわかるから終わり方の見当がつくが、朗読は終わりの推測がつかない分、意表を衝かれる効果がある。

この『花あらし』を書いた時、何を考えたか。私はお化けが好きだが、お化けって何だろう、幽霊は九十%が「見る」ものだ。怪談・牡丹燈籠のように、聴くものもある。外国には音の幽霊が多い。僅かだが「触る」幽霊もある。五感というからには、匂いの、味の、それがあってもいいのでは。ラフカディオ・ハーンは、気づいてみれば、彼は「恨み」の幽霊はほとんど書いていない、日本には圧倒的に恨みのそれが多いのに。恨みやない幽霊って大事なことではないか。終戦時住んでいた長岡には、桜の山が幽霊の顔になるという民話があった。それをヒントにした短編を、朗読を通して楽しんでいただけば、と。家内と『朗読21』を始めたのも短編小説が好きだから。小説の王道は長編かも知れず、いま、長編の方が増えているが、短編には別な世界の魅力がある。短編小説で家を建てたのは「阿刀田さんだけだ」とか「星新一さんと二人だけ」などと言われるが……。(笑い、拍手)

質問 ○ どうして「たくらみ」なのか？

「企て」というほど立派なものではない。人間のちよつとしたところ、ちよつとした題材をテーマに

しこしこやっている。こつちの世界から向こうに化けていく、あるいはむこうからこつちへ……その現場の作業を。

○ 学んだフランス文学との関係は？

二十世紀最後かもしれない輝き、サルトルの「実存主義」に影響を受けたが、一方サルトルが批判したジロドゥーの、軽やかで楽しめる戯曲に親しみ、どんなに深いモチーフを持っていても、楽しくないといけないんだな、と考えた。

○ (慶子氏へ) 加藤道子さんから学んだ印象深いことは？

ボランテアで朗読を、と点字図書館へ行ったら、一冊ドンと渡された。どう読んだら楽しく聴けるのか？ 隣のブースに加藤さんがいらして教室に参加生徒が五十人もいたのでなかなか聴いてもらえない。どう読むかは「自分で考えなさい」。「自分の頭で全てのことを「謎解き」する、探り探り自分で、徹頭徹尾考えながら読んでごらんなさい」。夢、どう考えたら？ 「やっぱり見なさい、見てなきやダメ」——この魅力的な先生に三、四年師事しました。

○ 歴史小説については？

「嘘を書いている」と思った方がいい。その時代と今とは全く考え方が違う。歴史に託して現代に想像力を馳せ、歴史的事実ではなく、歴史に借りたイメージで構わない。「事実」の後ろに真実があるなら——。

(メモに頼ってお話の大意をお伝えしたものです。

聞き違い、理解不足、表現の誤りなど、ご容赦下さい。文責・竹内修司・友の会会員)

## 平成二十九年友の会総会抄録

平成二十九年友の会総会は、五月十三日(土)世田谷文学館一階文学サロンで開催、午後一時に、堀伸雄企画委員の司会で開会された。

平出洗会長から、発足十九年、会員と共に、文学館の協力も頂き、活発に活動との現状報告があった。また菅野昭正世田谷文学館館長から、文学館のリニューアルと今後の企画の紹介があった。

平出会長が総会議長に推薦され、議事に入った。

一、平成二十八年活動報告ならびに収支報告  
柴田光滋副会長から配布資料に基づき説明された。続いて鈴木廣義会計監事から、適正である旨の監査報告があった。

二、平成二十九〜三十年役員選任  
平出会長から選任案が説明された。

会長 平出洗(再任)副会長 柴田光滋(再任)  
会計監事 鈴木廣義(再任) 若宮利夫(再任)

本議案は異議なく承認された。

三、平成二十九年活動計画ならびに収支予算  
柴田副会長から配布資料に基づき説明された。本議案は異議なく承認された。

四、年会費改定について  
平出会長から配布資料に基づき、世田谷文学館友の会の規約、年会費の改定(平成三十年年度以降、千五百円)につき説明された。

本議案は異議なく承認された。

平出会長、司会の堀企画委員から出席会員(八十六名)に謝辞が述べられ、午後一時三十分閉会した。(議決資料は同封)

「世田谷のモッコウバラ」

青山 七恵

数年前の春、日課にしている夕方の散歩に出かけようとして驚いた。住んでいる賃貸マンションと道を挟んで建つ一軒家の庭越しに、一本後ろの通りに建つ家が見えるのだが、その家の塀が黄色くなってるのである。よくよく目を凝らしてみると、それはペンキの落書きなどではなく、花だった。たくさんの淡黄色の花が密集して、塀の向こうから乗りだすように咲いているのだ。去年、あんなところに花は咲いていなかった。昨日だつて咲いていなかった。不思議なこともあるものだと思いつつ、そのままいつもの散歩に向かった。

数日後、世田谷線の車中で、またしてもあの黄色が目飛びこんできた。宮の坂から上町に向かう区間の、ほんの一瞬のことだ。窓から見える民家の壁の一部が淡い黄色に染まっていた。胸さわぎがしてすぐにポケットから iPhone を取り出した。Google で春に咲く黄色い花の画像を検索しているうち、見かけたばかりの花と同じ画像を見つけた。「モッコウバラ」というのが、その花の名前らしかった。

マンションの向かいの家の、さらに向こうで咲いているモッコウバラは、しばらく黄色いままだった。ある日とうとう我慢ができなくなって、家のまえまで見にいった。かたゆで卵の黄身の色に似た、小さなポンポンのような花がいくつもいくつも寄りあつまって、葉の緑をほとんど覆いかくしている。力の限り咲いています、という体なのに、まだ開いて

いない蕾があちこちにあった。近づいたり遠のいたりしながらじつと見ているうち、心にえもいわれぬ喜びがあふれてきた。いつかどこかに自分の家を持つことができたら、必ずやこのバラの苗を庭に植えて、春には塀一面に咲きほこらせようと決意した。

以来、春がくるたびにモッコウバラを求めて近隣の住宅街を歩くようになった。むりに探そうとせずとも、モッコウバラはいたるところで咲いていた。それまでの春、わたしはいつか、どこを見て歩いてきたのだろうか。今年は何心の公園で、見上げるほど高い木の梢にからまり、上から降りかかってくるように咲くダイナミックなモッコウバラを見た。とはいえ細い道が複雑に入りくみ、油断するとすぐに袋小路に追いこまれてしまう世田谷北部の住宅街にこそ、モッコウバラはふさわしいように思う。少しくすんだ色あいの家の壁や、いまにも崩れ落ちそうな古い石の塀を伝って咲いているあの卵色の愛らしい花のかたまりを見ると、思わず家ごと、そのなかに住んでいる人もまとめて、めちやくちやに抱擁したくなってしまふ。

わたしが子ども時代を過ごした埼玉の川辺の町では、春の花といえば利根川の土手に咲く菜の花だった。同じ黄色でも、菜の花の黄色は力強く鮮やかで、モッコウバラの黄色は淡くて優しい。二つの色は混ざらない。重ならない。どんなところに行っても、何に精魂を尽くしていようと、そのとき見つけた花の色で塗りわけられるような人生を生きていたい。

(作家)

作家紹介 埼玉生まれ。平成十九年『ひとり日和』で、第二三六回芥川賞受賞。世田谷在住。

わたしの一冊  
『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』  
加藤陽子著  
(新潮文庫)  
神田 康

この本は東大教授の加藤陽子氏(日本近現代史)が神奈川の栄光学園の中高生に対して行った五日間の講義を元に作られています。

序章で9・11後のアメリカの感覚と日中戦争時の日本との間に共通点を見出しています。

「今次事変は戦争に非ずして報償(不法行為をやめさせるための実力行使)なり。報償のための軍事行動は国際慣例の認むる所」(中支那派遣軍司令部)。時代や国が違っても、似たような感覚が横たわっている。歴史を学ぶことが今の私たちを語る上で大切なことに気付かされます。

一章から五章までは、明治維新以来の日本が行った日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変と日中戦争、太平洋戦争を順に取り上げます。当時の各国の視点、重要人物の発言、様々な角度からのデータ、エピソードなどにより戦争に向かう多面的事実が明らかにされています。

興味深いエピソードを一つ。一九三八年に駐米大使となる中国の胡適が一九三五年に唱えた「日本切腹、中国介錯論」。内容は「中国が日本との戦争をまずは正面から引き受けて、二、三年間負け続けることだ。そうすればアメリカとソビエトは介入してくる」というものです。絶大な犠牲を覚悟して、およそ十年先の日本の敗戦まで見通した政治家の存在をこの本で初めて知りました。

\*第九回小林秀雄賞受賞作。

(友の会会員)

## 講座 『伊勢物語』『大和物語』

—平安時代の歌物語を受講して—

細沼 陽子

恥ずかしながら今年還暦を迎えました。六十にもなればもう少し、モノに動じないモノの分かった人間のはずが、体は勿論、上等でない頭も心もとなく、エクササイズが急務となってきたように思われましました。そんなことでこの度受講させて頂くことになったのですが、なんと五十四年ぶりの寒波・雪となりました。これはいとあはれなり？をかしき？いや、おもしろき、とかでしようか……。いずれにせよあまり得意とはいえなかった古典の授業でしたが、雅さを味わいたくなって昔の高校時代などを思い出しつつ、拝聴させて頂きました。

平安時代というと、雅な十二単のお姫様や、源氏物語を想像してしまいますが、歌物語というジャンルがあつたのだと知った次第です。講師の糸井久先生のお話では、こういった物語の主人公は、出世コースから外れた、臣籍降下の上流貴族の主人公ということですが、都を離れ、恋しく思う気持やら、都に帰れない自分を憐れむやら、官位の心配やらで、なかなか大変な当時の縦社会の様子が窺がわれ、主人公の哀れを誘う心情が描かれています。一方でかなり女々しく、嘆き様が滑稽に思われるのは、現代人だからでしょうか？ よよと泣く、彼らの姿が頭の中に浮んでしまいます。でも、確か先生は、これはフィクションだとおっしゃっていましたので少しオーバーの方がいいのかも……。そう思うとつい妄想をしてしまいました。登場人物は上級貴族の三男坊あたり、なかなかの好色者で宮内内のいざこざや

ら、麗しいお姫様を巡っての恋のさや当て、はたまた鬼の登場。そして背景から流れる抒情たつぷりの嘆きの歌……。ザツツ・エンターテインメント！ではないでしょうか？ 私にもっと読解力があり想像力があれば、もっともっと楽しい読み物であるはずだと思つた次第です。

歌物語が廃れたのは、歌の集でもなく散文の物語でもない中途半端な物語だったからとのお話でしたが、この後没落に向つていく貴族社会を思うと、なかなか愛おしい作品たちだと思えました。楽しい時間をありがとうございました。（友の会会員）

（平成二十八年十一月二十四日、らぶらすにて開催）

## 講座

”本づくりの歴史と現在”



石津 幸子

平成二十九年一月、世田谷文学館友の会の講座は元新潮社の編集者であり、友の会の副会長である柴田光滋氏による「本づくりの歴史と現在」で始まりました。今までただ好きな作家の新作、書店で目についた、評判の高い、というだけで手にし、読んでいた私には、ひたすら恥じ入るばかりのお話でした。原作者の原稿が、いかに編集者の大変なご苦労を経て、読者に届けられたものがよくわかりました。

編集の現場では、「本はモノだから」と言う。定価・装丁にかかわらず、本である以上は、細部の細部に至るまでちゃんと仕立てなければ

ばいけない。柴田光滋『編集者の仕事』

原作者は、紙質、活字にも、それぞれ好み、希望があり、編集者としてすべてを心得たうえで本作りにかかり、原稿をモノ（一冊の本）に仕上げる。モノを作る作業、すなわちそれは職人仕事に近く、工業生産品ではなく、編集者一人ひとりの頭と手作業から始まると言われました。

現在、印刷技術はコンピューター組版システムによりますが、最近までは活字を組んで文字を刷る活版印刷でした。印刷職の父上からもらわれた鑄造活字を宝物として深い愛着を感じていらつしやる柴田氏は、今もなお活字を無視することはできない、と強調されました。

活字は、十五世紀半ばにドイツの金銀細工師ヨハネス・グーテンベルクによつて発案され、さらにイタリア、フランスで改良されたものだそうです。このグーテンベルク革命（と柴田氏はいわれます）は単に、印刷や書物の世界における革命にとどまらず、世界の歴史をも大きく変えた、グーテンベルクに感謝、と強調されました。

講座の最後に、オビのお話がありました。

オビは、ジャケットや函のデザイン、書名や著者名の位置、大きさ、全体の色調などと関連するが、—中略—要は、本を説明することではなく、読者をキャッチするためのもの。

思わず、ハイ！その通りです。私はいつもオビにキャッチされて本を手にとっています、と小声で叫んでいました。（友の会会員）

## 講座

『銀の匙』に描かれた童心の背景」を聴いて

藤野 寛

二月二十六日、春近い日に三軒茶屋近くの、らぶらす、で木内英実先生の講座『銀の匙』を聴いた。先生は東京都大准教授、著名な研究者である。

当日は配布資料が三点、講座と講師の紹介、『銀の匙』の著者・中勘助の略年譜、さらに要所でDVDが放映され周到な準備が伺われた。木内先生の明快な講座を聴くうちに、ぼくは長い間忘れていた子供たちの世界を訪ねていた。

岩波文庫の『銀の匙』は、ぼくが「少国民」であったころ読んだ本。戦時の外地で子供の読む本は枯渇しており、このころ大人向けの文学全集を読み出したなどの話は少なくない。岩波文庫は振り仮名が少ないが、読めない文字、知らない言葉はそのまま通過して行く。しかし本そのものを通過はしない。子供が体験し、子供が語り、子供が読む『銀の匙』は文句なしに面白かった。

まず登場するのは虚弱児の「私」と漢方薬用の銀の匙を探して来た育ての親、伯母さん。「私」はシンドバッドの妖怪のように伯母さんの背中にへばりついて、祭りへ、夜店へ、見世物へ行って幼児期を過ごした。伯母さんの革籠からは、戦道具、笛太鼓、玩具、なんでも出て来る。百人一首を毎晩教わり話の種は無尽蔵、大人の世界を教育してくれる。

「私」はようやく居心地の良い背中を離れ、自分の足で歩き出す。伯母さんが遊び相手まで見つけてくれた。子供の社会に入って行く。楽しい遊びも多いが、お決まりのいじめにも遭い、「ついに意を決し」

二尺ばかりの布袋竹を羽織の下にしるばせ、手下を率いた相手を成否は問わず、真つ向からくらわす。小学校入学でひと悶着あったが、なんとか成績も上がってゆく。成長とともに一家言も出てくる。

折しも日清戦争の最中、周囲の生徒、また教師まで、清国の悪口をやたら云うのが気に入らない。

「先生、中国にだって関羽や張飛がいるじゃないですか。武士道と言いながら、なぜ相手の悪口を言うんですか。」そのころ吉川三國志・赤壁の巻を併読していたぼくは快哉を叫んだ。教師の返事は「君には大和魂がない」という不条理なもので、ぼくも同じ憂き目にしばしば遭っていた。

木内先生の講座は、「いつでも子供の日に戻れたのが、中勘助です」と終った。ぼくの思いは過ぎし日の脇道へ遊んだが、素晴らしい講座を拝聴した。

(友の会会員)

## 講座

『三島由紀夫の思い出』を聴いて

鳴野 喜孝

講師の藤田三男さんは、生前の三島由紀夫を詳しく知る数少ない人である。あれ程強烈な個性を持った作家と長年付き合っ、編集や装幀をされた方とは思えない穏やかな人柄で、終始にこやかに話されました。

三島由紀夫と言えばその作品よりも、一般には晩年の『楯の会』の行動や自衛隊官舎での演説後の割腹自殺のイメージが強い人ですが、当時(一九七〇年、三島四十五歳)の文学者としても、人間としてもさ

まざまな魅力を持っていたことをエピソードを混えながら話されました。

彼の作品は当時、毎日何らかの雑誌、新聞、単行本などで、常時読者の関心を引いていたように思われます。

作品に対する取組み方は本当に真摯で、原稿の仕上がりも殆んど約束をたがえることはなく、約束時間でも「では何時頃伺います」と言うのと、頃ではなく、「何時に来て下さい」と言い直されたとか。

又作品を雑誌に発表すると、翌月には単行本として発行することが多く、編集者としては対応が並大抵ではなかったようです。

最盛期に、利用していた出版社が倒産し、彼の作品の原稿料がその社に大量に累積されていた状態だったようですが、彼は弁護士を利用するのが得意で、大部分を回収したとのこと。この熱意は彼自身のためよりも、関係していた『楯の会』のためだったと思うと話されました。

ではこの『楯の会』とは三島にとってどんな存在だったのか。当時の作品や、自殺に至る行動に強い影響力をもっていたと思われませんが、この辺について、全く語られなかったのは残念でした。

最後に三島の死について話されました。謎の部分が多いと前置きして、断片的な内容でした。

自殺願望は以前から持っていた。確かに男の美意識から出たものと思われる。目立ちたがりのところが強い人だった。これらが作品に対するちよつとしたつまずきと重なって、あのような行動に出た可能性は考えられるとのことでした。(友の会会員)

(平成二十九年三月三日、らぶらすにて開催)

## 散歩

「秋の江ノ島・由比ヶ浜から」

鎌倉・若宮大路を巡る」に参加して

堀 伸雄

あいにくの小雨まじりの晩秋の朝、江ノ電（江ノ島電鉄）「由比ヶ浜駅」に集合。夏は賑わうこの駅も、この時期は古都に相応しくひっそりとしている。川端康成、吉屋信子、大佛次郎、小林秀雄等「鎌倉文士」ゆかりの場所を訪ね、川喜多映画記念館にも足を延ばそうという贅沢な散歩である。

最初の訪問場所は、木立ちに囲まれた鎌倉文学館。学芸員の方の丁寧な説明を受けながら、常設展と特別展「ビブリア古書堂の事件手帖」を見学。文士達の原稿、手紙、日用品などの展示からは創作に対する作家達の苦闘が伝わってくる。見学後は広大な庭園とバラ園を散策。多彩なバラの華麗な花卉を通して見る文学館の洋風建築はひととき格調高い。路地を縫って吉屋信子記念館へ移動。北向きの書斎の大きな窓に面して漆黒の横長の机が置かれている。今でも主の信子を待っているようだ。

再び江ノ電で鎌倉駅に戻る。小町通り入口の創業明治二十年という和食「川古江家（かわごえや）」に入り、人気メニューのシラス丼を注文。昼食後、東口改札前で午後のコースを案内して下さる「NPO法人鎌倉ガイド協会」のお二人と合流。二班に分かれて小町通りを進む。食通文士たちが通った中国料理店「二楽荘」を横目で見て、川喜多映画記念館に向かう。ここは、日本の映画界発展に貢献された川喜多長政・かしこ夫妻の旧宅跡に開設された映画記念館。折しも黒澤明と三船敏郎に関する特別展を開催中。館内には、主に黒澤映画の世界各国のポス

ターをはじめ、パンフレット、台本、写真等の貴重な映画資料が所狭しと展示され、「世界のクロサワ」に圧倒される。学芸員の方から熱の籠る説明を受け、しばし映画青年に戻る。併せ、隣接する旧川喜多邸別邸を見学。和辻哲郎の居宅をご夫妻が移築したもので、日本庭園に面した縁側には、名優・笠智衆や海外の監督の写真等も飾られ、ここが映画人たちの国際交流の場であったことを偲ばせる。

鶴岡八幡宮方面へ移動。今回、新たに企画された「ゆかりの地での朗読タイム」として、会員有志が、舞殿の近くで川端康成『再会』、雪ノ下の大佛次郎邸前で大佛の『ここに人あり』の一節をそれぞれ朗読。格別の味わいで参加者一同感動。

大改修により美しく整備された若宮大路の「段葛（だんかずら）」に立つと、鶴岡八幡宮から二の鳥居の先までまっすぐ伸びた段葛が、鎌倉の中心軸のようで思わず息を呑んだ。雨上がりの落ち着いた街並みの中、文士たちの息吹と、歴史と文化の豊潤な香りをたつぷりと満喫した一日であった。

（平成二十八年十一月十九日に実施）（友の会会員）

## 新春散歩 — 神楽坂まち歩き — に参加して

大江 美子

今年の新春散歩は、恒例の七福神巡りの趣向を変えてまち歩きとなった。場所は、粋なまちで名高い「神楽坂」。しかも、半日コースだ！

私と同感の方が多かったのか大人気で、なんと七十名近い参加者が、善國寺前に集合した。ここ鎮護山善國寺は、山ノ手七福神のひとつ毘沙門天である。午後からは、七福神巡りもできそうだ。

ご案内は、江戸東京ガイドの会のボランティアの

皆さんで、我々は四班に分かれ、十時に出発した。

好天に恵まれ、まず、神楽坂通りを飯田橋駅方面に坂を下る。泉鏡花と北原白秋の旧居跡、『坊っちゃん』縁の東京理科大学、漱石が牛鍋をつついた「島金」（現在の志満金）、鷗外や龍之介が愛用した原稿用紙の旧山田紙店などを見ながら、今度は軽子坂を上る。途中、本多横丁や作家が缶詰めになって執筆した旅館「和可菜」前を通った。この辺りは、「神楽坂」の看板の石畳が敷かれた路地で、石畳の保存や修復の話を伺い、町並保存の努力を知った。

地蔵坂から日本出版クラブ会館にて小休止後、袖摺坂の狭く急な階段を登ると息が上がる。漱石の『それから』の主人公代助が三千代の家に通った坂道は、もつと小石川寄りらしいが：：、動悸は体験できたかもしれない。

尾崎紅葉旧居跡、島村抱月終焉の地・芸術倶楽部跡のプレートは寺が立ち並ぶ一角にあった。寄席や国内初の俳優養成所も近くにあり、当時の芸術家が行き交うまちだったのだと納得した。

倉本聰脚本のテレビドラマ「拝啓父上様」は、二宮和也さん主演で評判になったが、ドラマに登場した赤城神社へ。境内のビルは隈研吾氏設計の定期借地権付分譲マンションで、再生プロジェクトの成果だという。神社正面からの展望後、裏側も案内してもらった。高低差の激しい地形が一目瞭然だった。

紅葉、逍遙、漱石、啄木など文豪の原稿用紙で有名な相馬屋前を通り、ゴールの毘沙門天に戻った。時間的には短かったが、坂道で足は疲れ、七福神巡りは諦めた。今回、「神楽坂」の地理全体が分かった。次回は、ゆつくりと散歩を楽しみたい。

（平成二十九年一月七日に実施）（友の会会員）



文学館のたのしみ ～名古屋より～

中澤 満里子

長年、自宅で愛用しているビューロー (bureau) の扉を開けると、目の前に「ヘルマン・ヘッセの世界」二〇〇六年四月・世田谷文学館の切り抜きが飾ってある。そのヘッセさんの横顔写真は亡き父にそっくりなのである。醸造業二代目だった父は、雅号を「櫻水」とし、短冊、色紙などに、俳句、短歌、水彩画の作品を沢山遺している。残念ながら、父で家業は途絶えてしまったが。

一日一度はこのビューローの前に座るので、必ずヘッセさんを目にし、ふと心が和み、どうでもよいことを語りかけて時を過ごす。

ところで、一体、世田谷文学館友の会会員になって、どの位経つのだろうか。手元に残る会員証を繰ると、⑩二〇〇七年三月三十一日有効期限がある。ということ、ヘッセさんの時からか。実は、以前からY市K文学館友の会会員であり、K館でこの企画案内を手にしたのであろうか。なんとも覚えられない会員である。ウルトラマン、ムットーニのからくり、植草甚一、浦沢直樹など数多の企画展に向いている。なかでも『地に伏して花咲く宮尾登美子展』は印象深い。その日、懐かしい作品を一つずつ目で追いながら進んでいると、突然二曲一隻の屏風が現れた。石踊達哉画とある。宮尾作品といえ、一九九二年毎日新聞連載小説『蔵』の智内兄助挿絵がすぐ思い浮かび、一寸意外だった。石踊達哉個展が二〇〇八年名古屋で二回開催され、図らずも

ご本人に直にお目にかかる機会に恵まれ、その作品は勿論のこと、お人柄にすっかり魅了されたものである。お二人の結びつきに心が弾んだ。

文学館のたのしみはいろいろあるが、直筆原稿をまのあたりにすると、素直に心が寄り添える。活字となった作品とは異なった妙味があり、やりとりができる。そんな私自身のささやかなたのしみを抱きつつ、地方を旅する折には文学館を見つけると先ず訪ねてみる。その文学館に携わる方々の熱意と愛情に迎えられ、新しい発見が叶うこともある。正に醍醐味である。

文学館を巡る私の旅はまだ続くことだろう。  
(友の会会員)

散歩 // 我孫子の自然と

先人たちの跡を訪ねて

坪内 園子

四月八日土曜九時、我孫子駅前集合。私は生まれてから十年間我孫子に住んでいたが、その後五十年以上も訪れていなかったのが特別な思いで参加した。

地元ガイドお二人のご案内でまず杉村楚人冠記念館へ。朝日新聞で活躍し、手賀沼の美しい景観を世に広めたジャーナリスト。千坪もの庭の椿が見事。新緑の芽吹く樹々からは鳥のさえずりが聞こえ、俗世から隔絶されたような空間だった。

我孫子は明治大正期でも、東京から一時間程の距離、手賀沼を見おろす高台に別荘を持った人々は都会の喧騒を離れ、静かな我孫子の自然に触れてほっと一息ついたことだろう。

その中で後世への影響が大きく、我孫子の文化の

元とも言えるのが楚人冠と嘉納治五郎だ。次は嘉納の教え子村川堅固(西洋史学者)の別荘へ。欧州留学で「住」の重要性を認識した村川の別荘は貴重な文化財として市と市民によって守られている。

白樺派の人々が我孫子に居住したのも嘉納との縁で、甥の柳宗悦夫妻が嘉納の別荘の隣に住んだことに始まる。柳が志賀直哉を、志賀が武者小路実篤を誘って三人は大正の一時期この地で親交を深めた。はげの道を通って志賀の屋敷跡へ。タイル上に表示された当時の間取りと、建物として唯一現存する茶室風書齋を見学。次に斜め前にある白樺文学館へ。柳の妻で声楽家、兼子のピアノがある部屋で解説に聞き入る。武者小路は二年ほどで「新しき村」へ移ったが志賀は父との和解を経て作品を次々発表し、また柳は朝鮮の焼き物に出会い民藝への目を開かされるなど、彼らにとっても白樺にとっても我孫子での日々は重要な時期であった。解説を聞きながら当時のおらかな交流の様子を想像した。

志賀と武者小路が舟で行き来したという手賀沼に沿って西へ遊歩道を歩く。公園まで行くと視界が開け雨に烟る静かな沼と満開の桜、人懐っこい白鳥が迎えてくれた。アビスタで昼食、その後中勘助が仮寓していた屋敷の門前まで行き、解散となった。

解散後一人で嘉納の別荘跡を訪ねた。私が住んでいたのはその嘉納の別荘で、南に面して細長い平屋を、親戚三軒で分けて暮らしていた。建物は今はなく天神山緑地として市が管理している。毎日手賀沼を眺めて過ごしていたあの建物が、大正期、次々と我孫子に人を呼ぶきっかけとなり、その経緯が熱心に語り伝えられていることを初めて知り、胸が熱くなった。  
(友の会会員)

～こういう催しがありました～（2016年11月～2017年3月）

【講演・講座】

（企画委員会）

月 日	講演・講座名	講 師	内 容
2016年 11月24日	講座 平安時代の歌物語 『伊勢物語』『大和物語』 ～平安期貴族社会で生み出された、「歌物語」の美しくも哀切な物語世界を味わう～	糸井 久氏	神の愛でし「歌物語」とは。主人公たちは、恋に惑溺し雅に生きて、その思いを歌にうたいあげようとする<好色者>の貴公子たち。たちまち親しみを感じ、古典文学の魅力を味わった。
12月7日	講座 100年前の彼女たちに会いに行こう（その2） ～ 芙美子・翠・晶子・らいてう・野枝・弥生子・みすゞ～	山下 聖美氏	山下氏の心に刺さる日本の「女脳」作家7名のうち、前回の講座でお聴きできなかった林芙美子・尾崎翠・野上弥生子・金子みすゞについて、それぞれの女脳パワーを篤と伺った。
2017年 1月22日	講座 本づくりの歴史と現在	柴田 光滋氏	ヴェネツィア黄金期の出版人アルド・マヌーツィオの成し遂げたこと——本を仕立て、書店で売るといふ商業出版を確立させたことを知り、本というものが一層愛しくなる思いである。
2月26日	講座 中勘助の『銀の匙』に描かれた童心の背景	木内 英実氏	『銀の匙』は、和辻哲郎が絶賛したという「幼い子供の心の細かい陰影の描写」そのものであった。その背景にある勘助自身の人生も崇高で興味深いものがある。
3月3日	講座 三島由紀夫の思い出	藤田 三男氏	三島由紀夫と直に仕事をされていた藤田氏の体験的な語りにより、三島が文学者としても人間としてもさまざまな魅力を持っていたと確信できる極めて貴重な講義だった。

【散歩】

月 日	散 歩 名	案 内	内 容
2016年 11月19日	散歩 秋の江ノ電・由比ヶ浜から鎌倉・若宮大路を巡る ～川端康成、三島由紀夫、吉屋信子、大佛次郎らゆかりの地～	鎌倉ガイド協会の皆さん、各館学芸員	由比ヶ浜の鎌倉文学館、吉屋信子記念館を訪問の後、午後から鎌倉に移動、川喜多映画記念館「世界のクロサワとミフネ」特別展を観賞。鶴岡八幡宮から伸びる若宮大路の段葛は平成の大改修を終え美しく見事であった。小雨の中、しっとりとした鎌倉の香りに包まれた秋の一日となった。
2017年 1月7日	新春散歩 神楽坂まち歩き ～尾崎紅葉・坪内逍遙から島村抱月・松井須磨子らが活躍した舞台・神楽坂を巡る～	江戸東京ガイドの会の皆さん	年初の歩き初めということもあってか、参加者は4班にも及んだ。晴天の中、毘沙門天を順次出発、地元を知り尽くしたガイドに誘導され、知らなかった路地も多く、歴史の面影を色濃く感じた神楽坂まち歩きであった。

世田谷文学館は、昨年9月から約8ヶ月の間、改修工事のため休館していましたが無事工事を終え、4月22日にリニューアルオープンしました。新装なった文学館へご来館いただき、これまで以上に文学館や友の会主催のイベントもお楽しみください。

編集後記

「シリーズ世田谷とわたし」は、今号で3回目、手探りで始めたものの、世田谷在住作家の方々の惜しみない協力を得て持続しています。身近に多くの作家たちが住み、それぞれ力強い信念を持ち活動されていることを知り、豊かで確かなものを感じています。長く続く「世田谷区民ではないけれど」

は、遠くに住む会員の方々も熱心に会報を読み、快く寄稿して下さり感謝です。世田谷文学館や友の会への思いも強く、それに応えられるよう私たちも一層努力し魅力ある企画を、と。これからも皆様、会報のよき読み手であり更に書き手にもなって下さい。どうぞよろしく！（森ゆり子）